

松本清張

小説セレクション

13

喪失の儀礼

阿刀田高 編集

松本清張
小説セレクション ⑬

喪失の 儀礼

刀田高編集

松本清張小説セレクション 第13巻

喪失の儀礼

©1996 検印廃止

1995年12月25日初版印刷

1996年1月10日初版発行

著 者 松本清張

発行者 嶋中行雄

印刷者 山元 悟

本文印刷 三晃印刷株式会社
カバー・表紙・扉印刷 株式会社大熊整美堂
本文用紙 新王子製紙株式会社
製本 小泉製本株式会社

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋2-8-7

振替 00120-4-34

ISBN4-12-403323-0 C0393

Printed in Japan

目次

喪失の儀礼…………… 3

へ編集エッセイ
いくつもの登り口
阿刀田高…………… 365

喪失の儀礼

蒼白き死

ある年の三月十三日から十五日までの三日間、名古屋で内科医ばかりの学会が開かれた。大学の付属病院に勤務する医局員ばかりでなく、開業医も「勉強」のために参加していたのである。その年は名古屋の私大医学部が幹事役に当たったので会が土地で開かれたのだが、東京、大阪、京都をはじめ北海道から九州にいたるまで約二百名あまりの参集があった。

もっとも、この種の「学会」の数は少なくない。内科といっても専門的に細分化されているのでそれに応じていくつもの学会があり、その上、出身学校系統別にもつくられているから、少し大げさに云うと一年を通じて学会が始終どこかで開かれていることになる。

名古屋のその学会は、最終日の十五日午後三時には切上げられ、一同で犬山に向い、溪観荘ホテルというのに入った。六時からは懇親会である。

こうした費用は「恒例」により製薬会社の寄付で大半がまかなわれる。今回は栄光製薬がうけ持ち番であった。が、どの製薬会社はその費用に寄与しようと、この事件には直接の関係はない。たとえ、そこに不明朗な利益の相互関係が存在しようとも。

東京からこの学会に参加したなかに明和医科大学病院の住田友吉すみだともきちがいた。内科の医局員だが、講座制によって講師の資格だった。

住田は三十八歳で、二人の子供がいた。面長の顔で、顴骨かんこつが出っ張り、顎の線が角ばっている。眼鏡の奥の近眼はとびだしたように大きく、鼻は扁平へんぺいに近い。頭の毛が少し縮れ、眉が濃く、色は黒いほうで、そのひろい額はいつも汗が滲しみんでいるように脂あぶらがうかんでいた。

住田は明和医科大学病院内科では診療主任であった。部長は教授だが、患者の実際の診察には減多に当らなかつたので、その下の助教授が部長代行のようになかたちで医局を統轄とうかつし、住田と、もう一人の主任とを動かしていた。医局員は総勢で十二人居た。総合大学病院だからほかに外科も婦人科も眼科も泌尿器科も耳鼻咽喉科も備わっていた。

《昭和六年四月生。本籍、新潟県三条市。N大学医学部卒。成績優秀。明和医科大学病院勤続十四年。診療技術優良。性格——診療に積極性あり、研究心旺盛。上級者によく、同僚との折合いは可。患者の受けは頗すこぶるよし。看護婦に対しやや酷使の傾向があるが、それも本人の診療熱心の現われとみる評あり。多少孤独癖があるが、友人との交際は普通。妻文子ふみこ（三一）との間に一女（八）一男（三）あり。夫婦仲よし。現住所、東京都大田区大森××番地。趣味は俳句。『秀樹』

同人。マージャン。酒、晩酌二合程度。現在のところ婦人関係なし。病院の同僚と私的な往来はあまりない。俳句の同人仲間の数人とは親しい。『秀樹』はいわゆる現代俳句の傾向である。』

これが警察で調査した住田友吉という被害者の大体の輪郭である。どうせ病院の関係者から聞いたことを主体に、他の友人や近所の評判などをあつめて合成したのだろう。

これによると、住田は病院の医者として優秀なほうで、趣味も悪くなく、夫婦仲はむつまい。浮いた噂がないというから、友人関係の円満と共に、まず申し分ない人物という印象を警察では受けたことになる。

ただ多少気になるのは「診療に対して積極性」という点である。医者が診療に積極的なのは、決して悪いことではなく、むしろ称讃すべきことなのだ。患者が感謝する医者に違いない。だが、それは開業医の場合で、総体的にいつて大学病院につとめる医師としては、ときとしてその特異な積極性が他の医局員の迷惑となる場合がないとも限らない。部長ともなれば別だが、平の医局員のなかにそんな人間がいると、多少でも勤め人的な資性を持っている連中には、「余計なこと」をするという感情が起らぬでもあるまい。他人の眼にはどうしても自分と比較されて見られるのである。勤勉な人間はときどき職場の仲間に苛立たしさを与えることがある。

しかし、あとで警察が調査した限りでは、医局の中で住田はうまくいつているほうであった。ただ、その仕事熱心ぶりはだれもが認めていたが、それに相当するだけの尊敬はあまり払われていなかったようである。それは、他人迷惑という点にもかかわるのだが、その熱心さが住田自身

の立身出世主義と関連があるように見られたからでもあるらしかった。

だが、そのようなことはどの勤め人の世界にもある。そのために特に住田が医局の中で憎まれているわけでもなかった。あれはああいふ人間だということを通じてしまい、ことさら同僚間の摩擦はなかった。ただ、住田の仕事に対する積極さが看護婦たちには人使いの荒さとなって被害感を与えるくらいのものであった。「同僚との折合いは可。看護婦に対しやや酷使の傾向がある」と警察が書いたのも、以上のようなことの要約だった。

住田友吉が溪観荘ホテルの大浴場に午後五時ごろ他の学会出席者といっしょに浸っていたのは確実である。この浴場は岩風呂と称して奇岩怪石が壁にはめこんであるが、湯気のせいもあって、こっちの端から向うの端が霞んでよく見えないくらいだった。一方の大窓には眼下に溪流と岩礁とを見下ろし、それがまた岩風呂の風情と似合った。ホテルは最近出来たもので、犬山橋から木曾川の上流に向って北岸の鵜沼の側にある。この犬山橋と上流^{いまわたり}今渡の間十三キロが「日本ライン下り」で、ホテルの窓下の船着場にも始終舟が集まっている。

住田が岩風呂の中で眼をつむって陶然となつているところに、東京から来ている別の大学病院の医局員Aがへこんだ腹を見せながら近づいてきた。

「住田さん。今夜は宴会のほうは少し早目に切りあげてマージャンでもやりませんか。明日は日曜だし、東京には夕方までにゆっくり帰ればいいでしょう」

その声に住田は眼を開いて、ちよつと間の悪そうな笑いをつくつて答えた。

「いや、それがね、そうはゆかなくなったのですよ。ぼくはこれから宴会も失礼して、ここを出かけることになったのです」

「ほう、今からですか。すると、病院のほうに気にかかる患者でもあるのですか」

住田の診療熱心を知っているAはそう訊いた。

「いや、患者のことじゃありません。……この近くにちょっと知った人がいましてね。どうしても、今夜その人に会う用事があるのです。宴会に出てすぐ消えるのでは皆さんに悪いから、風呂だけ浴びて失礼しようと思っています」

住田はそう云ったあと両手で湯をすくって顔を洗った。――

《住田氏から用事が出来たので今夜はホテルに泊らないという申出をうけたのはその日の午前中でした。何でも知人が名古屋の近くにいるから、土曜日なので、その人を訪ねる約束をしたということでした。それで、わたしのほうは割当てた部屋を変更するやら、宴会の料理を一人前減らすやら、ちょっとあわてました。もう少し早く連絡してもらうとよかったんですが、住田氏もその時になって急にその気になったのか、あるいは相手の人からそう云ってきたのか、どちらかでしょうね。でなかったら、学会のはじまる前にそういわれるはずですから》（三月十七日午後四時）

幹事役が警察に述べた言葉である。

名古屋近くにいる知人とは誰のことか。

《わたくしには心当りはありません。主人は一度もわたくしに名古屋近くに知合いがいると話したことはありませんし、手紙もはがきも来たことはありません》（三月十七日午後六時）

妻の文字の話である。

《さあ。われわれも住田さんから一度もそんな人の話を聞いたことはありませんね。……患者関係ですか。そりゃ、病気を癒^{なお}してもらった地方の人が、そのお礼に近くを通りかかった医者をお呼びすることはたまにあります、それには事前^{さきより}にその連絡があるはずですからね。今度の場合、名古屋の学会に住田さんが出席することを新聞か何かで知った人だとすると、出発前に住田さんに電話するか手紙を出すかでしょう。住田さんがホテルにも泊らないでその人を訪ねて行くくらいなら、われわれにそのことを話さないわけはないと思いますがね。念のため、一応、名古屋方面からこの病院に來た患者をカルテの中から探してみますがね》（三月十八日午後二時）

おびただしいカルテのなかから過去三年間、名古屋付近から來た患者を拾うという厄介な作業（これは看護婦の仕事になったが）の結果、二十数人が扱^{つか}び出された。が、警察が当^{あた}ってみて、いずれもその事実がなく、事件にも無関係と判^はった。

《『秀樹』の同人は、東京が中心で、京都、大阪、福岡に数人ずつ居ます。名簿はこれです。名古屋付近には一人もいません。同人というのは、いわば秀樹社の幹部級の俳人で、全部で三十二人です。住田さんもその一人です。創立当時のメンバーではありませんが、投句がすぐれているので推薦で会員から同人になった方です。会員というのは全国にわたって四百人以上居ます。も

ちろん名古屋市内にも、その付近にも在住者があります。しかし、同人ならともかく、一般投稿者の会員のところに住田さんが学会の懇親会をすっぱかしてまで訪ねて行きますかねえ。それだったら、日ごろから住田さんと交際や文通があるだろうし、げんに住田さんは名古屋に出発される二日前に、ぼくのところにみえましたから、そのときその話が出るはずですがねえ」(三月二十日午後一時)

現代俳句誌秀樹社主宰山科伊佐緒やましな いさおの供述である。

住田友吉は三月十五日午後五時四十五分に溪観荘ホテルの玄関に小さなスーツケース一つをさげて立ち、ホテルに云いつけて呼ばせたタクシーを待つていた。

このとき、栄光製薬株式会社の販売部係長の小池こいけ為吉ためきちが傍を通りかかって住田の姿を見とがめた。

「おや、住田先生、どちらへ？」

小池は愛嬌のあるまるい顔をむけた。今度の学会の大口寄付者である栄光製薬は、今夜の懇親会では来賓という資格で「招待」されていた。

「うむ。ちょっとね。この近くに知人がいるので、いいついでだから名古屋で遇あうことになつてるんだよ」

住田はそう答えた。ここではAや幹事に云った彼の言葉とは少しニュアンスが違っている。住

田は名古屋近くにいる知人を訪問するとは云わずに名古屋市内で相手に遇うと小池に告げている。「ほう。それでは宴会の席でゆっくりお目にかかろうと思いましたが残念ですね。すると、今夜は名古屋にお泊りなんですか？」

《余計なことを訊いたように思われますが、わたしのつもりでは、その知合いの方に遇われたのちに東京にお帰りになるのか、それとも名古屋に一泊なさるのかと、気軽に住田先生におききたわけです。まあその場の挨拶みたいなものなんです。そのとき、先生は、ちょっとバツの悪そうな顔をして、今夜はこっちに泊ることになるだろうね、名古屋になるかどうか分らないが、と云われました。そのときの調子では、相手とどこかで落合うけれど、その先はどこかまだきまつていないというふうに受取れました。さあ、その相手の人が男性だか女性だかはちょっと判断がつきません。バツが悪そうな表情をなさったのも、懇親会をすっばかすことになったからじゃありませんかね》(三月十九日午前十一時)

警察の問いに対する小池の答弁だった。

ここで行方不明になる前の住田友吉の予定行動がやや明確になった。すなわち彼は「名古屋近くの知人」の家を直接に訪問したのではなく、その知人と何処かで落合い、それから実際の行先なり泊り先なりを決めるつもりだったようである。

問題なのは、住田がその相手の人物と遇うことをどのようにして約束したかである。妻の云うところでは名古屋方面からの文通はなかった。もっとも、それは住田が家でなく、病院から電話

で連絡をとることもできるし、手紙が病院宛にくることもある。

《住田先生には手紙やハガキが一週間に五、六通くらいいのわりできていましたが差出人の名前はいちいちおぼえていません。男名前も女名前もありましたが、患者からの礼状が多かったと思われます。ハガキの文面がそうでしたから。電話はほとんどかかってきませんでした。たまにかかって、それは俳句関係の方だったと思います。住田先生のお話し方でそれと分りましたから。先生が名古屋の学会に出張される前日も前々日も何も電話はかかってこなかったと思います》
(三月十七日午後三時)

これは明和医科大学病院内科の看護婦たちの供述を総合したものである。

もし、住田友吉が東京出発前に名古屋で誰かに会い、そのために溪観荘ホテルの宴会にも出られず、ホテルにも泊れないことが分っていれば、彼は学会が開かれた初日の十三日に幹事(地元大学側)にその旨を申入れていなければならない。ホテルの部屋割りがすでにきまっているから、変更は早いほど幹事に迷惑をかけないでむし、また、それが礼儀でもある。ところが住田がその連絡を幹事に入れたのは学会最終日の十五日の午前中だったのだ。

そこで、住田が「名古屋近くの知人」と遇う約束が出来たのは名古屋に来た二日目の十四日という推定が強くなってくる。彼は急に予定を変更したのだろう。が、その約束が十三日だったという線は考えられない。それだったら前記の理由で十四日のうちに彼は幹事に変更を通知するだろうからである。彼は幹事役に「土曜日なので」といっている。そうすると、相手の「知人」は

勤め人なのだろうか。

十五日午後六時五分前に住田友吉はホテルに呼ばせたタクシーに乗った。それは土地のもので、運転手は杉山^{すぎやま}という二十六歳の男だった。

「何処まで？」

車を走り出させてから杉山運転手は座席の客に行先をきいた。

「名古屋市内」

「どの辺ですか？」

「名古屋にM町通りというのがあるね？」

「あります。一丁目から七丁目まであります」

「そこまで出たら、降りる場所を云うから」

客は答えた。その声にどこかはずんだような響きがあったと杉山運転手はあとで云っている。

犬山から名古屋に入る道も混んでいたが、市内はもっと車が詰っていた。住田が腕時計を何度かのぞくのを運転手はバックミラーで見ている。

「お急ぎですか？」

運転手は客がだれかと遇う時間を気にしていると思ってそう訊いた。

「うむ、なるべく早いほうがいい」

「この時間はちょうどラッシュアワーなので……」